「モシ、駕行きまひようか」
「ア、吃驚した、なんや駕屋か、龍宮にも駕が有るのか」
「ヘエ海の底でも駕がおます」
「何處へでも行くか」
「ヘエ參ります貴郎何處だす」
「私は大阪やが大阪なら何處が驛場(たてば)や」
「そうだんな、天王寺の龜の池か天保山だんな」
「天保山まで何程で行くね」
「ヘエ天保山なら二歩で行きまへうか」
「天保山まで二歩とは安い乘つて遣ろ、併しお前の顏と云ひ頭の毛から身體中赤いがお前は何んや」
「ヘエ海に住んでまんね私は猩々だす」
「なんや猩々か折角やがお前の駕には乘れん、酒手が高(た)價(こ)つく」

小咄　龍宮

乙姫浦嶋を龍宮へむかへ、いろ〳〵ともてなし魚どもをあつめげいづくしをさせてなぐさめける、さしづめどじやうがおどりこにて、むすめどじやう寺の一手「辨けい力をいれてつくときわ、ぜしやうめつぽうとひゞくなり」
「これ〳〵それはむかし俵藤太秀郷にやつた三井寺のかねじや、いままうは道成寺のかねではないか」
「ホンニそうじやあつたかねといふものはとかくまちがひやひ物」「そして俵藤太は近江の水海じやがこゝとはちがふか」
「太平の御代なれば四かい一とうでござり升」

昔むかし噺の魁　蓬萊文曉

上方はなしリレー放談(3)

元旦に聽く落語

岸本水府

おとしばなしといつたやうなものは、父や母から短いものを、小さい時によく聽いてはゐたが、落語として形をなしたものを初めて聽いたのは、私の十一二歳の頃、父が官吏をやめて、松山から大阪へ來た時の頃であつた。恩給を貰つて型の如く煙草屋をやつた。大工さんに二階を貸してゐたが、この大工さん素人と思へないほど落語が上手で、毎晩のやうに私たち家族に落語を聽かせてくれた。隨分澤山のネタを持つてゐて、後に思つた事だが話しぶりも身ぶりも玄人そのまゝであつた。

今でも工場などで、女工さんたちの前で落語を聽かせると、肝腎のところでなく、何でもない、身ぶりや言葉のと